修学旅行を終えて

ゼロ少佐

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

修学旅行を終えて

原作とは違う方向に進む奉仕部の物語です

目次

1話　崩壊　1
2話　依頼　8
3話　そんな自分が嫌いだ　13
4話　本物　20
5話　想い　28
6話　姉妹　39
7話　変化？　46
8話　結論　51

1話　崩壊

今日は修学旅行が終わってから　最初の登校日だ
だが、俺の心にはあの言葉が刺さったままだ
「貴方のやり方、嫌いだわ」
「人の気持ち、もっと考えてよ」
この2つの言葉が俺を苦しめる
どうして…俺に任せると言ったのに
何で…そんな事が言えるんだ
俺の心には深い傷がついた
八幡「部室行きたくねーなー」
ついポロッとでてしまう
だがサボったら雪ノ下や平塚先生に何されるか分からない。だから嫌々ながらも部室に向かう
ガラガラガラガラ
部室のドアを開ける

八幡「うす」
雪乃「あら、嘘吐き谷君来たのね、もう来ないと思ったわ」
来てそうそうこれかよ、舌打ちをし自分の席に着く
雪乃「舌打ちなんてやめてくれないかしら？下品よそれに不快だわ、貴方は周りに不快な思いしかさせる事が出来ないのかしら？」
八幡「そうだよ…悪いか」
心にも思ってない言葉を吐いてしまう
雪乃「そう、分かってるのならいいのだけれど」
沈黙が訪れる　別に気まづくはない
俺はどうせ本を読んで空気に徹しているからな
結衣「やっはろー！ゆきのん！」
雪乃「こんにちは、由比ヶ浜さん」
結衣「それとヒッキーも」
八幡「おぉ」
それとって何だよ俺は結局ついでかよ…
…って駄目だすぐ悪い方に考えてしまう
結衣「ねぇ、ゆきのん」

雪乃「えぇ」
何か2人が小言で話している。別にどうでもいいが
聞かれたくない会話でもあるのか？
雪乃「ごめんなさい比企谷君少し眠ってもらうわ」
八幡「はっ？」
トンと首を叩かれ意識が飛ぶ
次に目覚めた時は椅子に足と腕をロープで固定されていた
八幡「おい！何のつもりだ!?いじめにもやっていいことと駄目な事があるだろ！」
俺は今の状況に激怒した
そりゃそうだろう拘束されているのだから
雪乃「黙りなさい、こうでもしないと貴方すぐ逃げるでしょ」
は？逃げる？なんの事だ？
結衣「ごめんねヒッキー　手荒な真似して　でもね私達も真相知りたいんだ」
は？こいつは何を言っているんだ？
真相？修学旅行の事か　まだ海老名さんの以来の事を理解してないのか…別に終わった事だからどうでもいいが
雪乃「貴方はなぜあんな事をしたの？」

八幡「その質問に答える前に　お前らに聞かなきゃならない事がある」
睨みつけるように雪ノ下に向かって言った
雪乃「ふざけないで　私達に聞くって今更何を?」
八幡「お前らは何故俺にとって任せると言ったくせに
こんな仕打ちにあわなきゃいけないんだ
まぁいい　取り敢えず今からいう
由比ヶ浜、お前は葉山と戸部の告白の依頼を受けようにと俺らに言った。当然俺は断ったし、雪ノ下も渋っていた。それで結局お前が雪ノ下を説得し依頼を受ける事になった。
雪ノ下お前は今回私に出来ることは少ないから俺らに…俺に任せると言った
二人ともそうだよな?」
雪乃「ええ」
結衣「うん」
八幡「それで?依頼を受けた由比ヶ浜は一体何をした?特に何も出来なかったよな?
雪ノ下も同様だ。
それで俺に任せることとなった。
俺はあの時最前の手を打った違うか?

違わないよな？あの時に手段は残されていなかった。
あれしか方法は無かったんだ。
それに千葉村や文化祭で俺のやり方を知っただろ？
それなのに俺に任せた
無事依頼を無事解決したらお前らは俺を突き放した。
……俺があれからどれだけ苦しんだか分かるか？
分からないよなお前らには。俺は唯一の居場所を
見つけたと思っていた。俺にとっての奉仕部は
家族以外の初めての居場所だと思っていた。
だけど違った。お前らは俺を裏切った。
離れて行った。グスッ　違うか？」
八幡「それに、お前らは気付いてなかっただろうが
海老名さんは俺達に戸部の告白を止めてくれと
依頼した。多分葉山は板挟みだったのだろう。
だから俺達…　俺を利用した。これが全てだ」ポロポロ
涙が頬をつたっていた
雪乃「ごめんなさい…ごめんなさい」

結衣「ごめん。ごめんね…」
２人は泣きながら俺に謝罪していた
だけど俺にはもうこの２人を信じる事が出来なかった
変な話だろうがたった１度裏切られただけで俺はそいつの事を信用出来なくなってしまった。
八幡「別に謝らなくていい、俺に居場所なんてなかっただけなんだ」
この時すすっとロープが解けた
そんな強く結んで無かったのだろう
話してるうちに何度も力んでいたし、
それで弱まっていたのだろう
結衣「お願い、ヒッキー戻ってきてよ
ここはヒッキーの…私達３人の居場所なんだから」
雪乃「そうよ、比企谷君　確かに貴方にひどい事をしてしまったわ、だけど抜けないで…私達には貴方が必要なの」
まったく都合のいいことだ
失って気付く本当の大切さか
俺にはそんなの分からないだから

八幡「すまん、俺はもうお前らを信用できない、
じゃあな」
そう声を掛け部屋を出る
２人の泣き叫ぶ声が聞こえたが気にする事はなかった
どうせあそこには俺の居場所はないのだから

２話　依頼

奉仕部を抜けて３週間程がたった。
最初の１週間は由比ヶ浜や雪ノ下が説得しに来たが
１週間断り続けたら来なくなった。
これでやっと安寧なぼっちライフを送れると思っていた
２週間が経った頃戸塚が俺を呼び出した
何があったのか教えて欲しい。
友達として今の俺は見るに堪えなかったようだ。
言うまで帰す気がないと言う感じだったので
俺は事の顛末を掻い摘んで説明した
その時は帰ってくれたが次の日から
どうせ放課後ひまなんでしょ？との事で
ほぼ無理やりテニス部と一緒にテニスをさせられた
元々ある程度出来ていたので１年の奴らには
すぐ追いつき、それから戸塚と練習するようになった

今となっては戸塚と真面にラリーが出来るくらいには上手くなった。だけど戸塚が言うには心ここに在らずみたい…らしい。
まぁ、そんな事はどうでもいいのだ
今はこっちの方が大切だ
八幡「何の用ですか？雪ノ下さん」
そう、今目の前に雪ノ下さんが居る。
雪ノ下雪乃の姉にして大魔王の陽乃様だ
陽乃「君なら呼んだ理由位分かるんじゃないかな？」ニコ
この笑顔だ。強化外骨格の裏にある禍々しい陽乃さんの本性だ。
八幡「雪ノ下ですか？」
ある程度予想はつく。この人がなにかしてくる時はいつも雪ノ下に関連しているから
陽乃「ピンポーン君にはね雪乃ちゃんの事で依頼したい事があるの」
八幡「俺はもう奉仕部を辞めました。だからもう依頼を受ける事はありません」
もう俺は奉仕部の部員ではないのだ
こんな面倒な事受ける必要がない
陽乃「ええー静ちゃんに聞いたけど名簿はまだ残ってるよー？」

あの先生まだ退部扱いにしてなかったのか
確かに「そうか、お前がそう言うなら認めてやろう。ただしいうでも戻ってこれるように名前だけは残しといてやる」と言われ断ったのだがな…
八幡「じゃあそんな名前だけの幽霊部員に何の用ですか？俺は貴方の依頼を受ける義理はありませんよ」
陽乃「確かに義理はないね、でもお姉さんに貸しはできるよ」
普段ならそれがどうしたと言えるが
この人相手の貸しとなれば訳が変わる
雪ノ下さんの人望の厚さに権力
それにこの人の美貌利用しようと思えば色々ある
だけど
八幡「俺がそういうのに興味ないの知ってるでしょ？」
陽乃「連れないなー　珍しく私が命令じゃなく頼んでいるんだよ？事の重さが君なら分かると思うけどな」
確かに言われてみればそうだ
八幡「はぁ…分かりましたよ　ただしこっちだって条件があります」
ここで貸しともう2つだけ条件を付けることができた

陽乃さんはぷくぅと頬を膨らませ生意気と言っていたが
まぁいいだろう
条件とは
①文化祭の時のような嫌がらせを俺や雪ノ下にしない事
②人前で抱きついたりしない事
その変わりに陽乃さんは1つ要求してきた
本人曰く簡単な事だと言ったが
内容は雪ノ下さんではなく　陽乃さんと呼ぶ事だった
まぁそれ位はいいだろう
陽乃「それじゃよろしくね♪比企谷君」
八幡「うす」
そう言って陽乃さんと別れた
戸塚「何処に行ってたの？もう始まってるよ」
少しご機嫌斜めだった…
八幡「すまん、これから奉仕部に行かなきゃならんくなった。今日をもって体験期間を終了する　今までありがとな」
そういいテニス部を去った

久しぶりに通るこの道　昔の思い出が蘇る
俺が捨てたあの場所の思い出だ
奉仕部の部室の前に着いた
少し緊張したがもう大丈夫だ
コンコン
ドアを2回叩きノックする
中からどうぞと雪ノ下の声が聞こえてきた
ドアを開け懐かしの部室に入る
八幡「よぉお前ら、久しぶりだな」

結衣「ヒッキー!!」
雪乃「比企谷君!?」
中に入ると2人が駆け寄ってきた
中を見ると俺のいた席が残ってあった
こいつらまだ俺の事待っていたんだな…
そんな事を考えながら部屋に入っていく

3話　そんな自分が嫌いだ

八幡「よぉ久しぶりだなお前ら」
結衣「ヒッキー！」
雪乃「比企谷君!!」
結衣「戻ってきてくれたんだね…良かった」
雪乃「何で今更戻ってきたの？」
おっといきなり辛辣の言葉来ましたわ
もう泣きそうだよ
結衣「ゆきのん！何でそんな事言うの！ゆきのんだってヒッキーが帰ってくるの待ってたじゃん！」
雪乃「それとこれとは別と思うのだけれど、だいたい私達が説得にも応じなかったじゃない。
それにもう説得を辞めようと言ったのは由比ヶ浜さんじゃない！」
結衣「それはゆきのんが！…もうゆきのんなんて知らない！」
雪乃「えぇ！私も貴方みたいな人と縁が切れて清々するわ！」

雪ノ下が廊下に飛び出そうとしていたので首根っこを掴む
雪乃「離してくれないかしらセクハラで訴えるわよ」
八幡「ちょっと落ち着けお前ら　ほら一旦席につけ」
訴えるなり好きにしろ　今なら陽乃さんに頼み込んで無かったことにして貰えるしな
雪乃「何よ居なくなった人にどうこう言われる筋合いはないわ！」
これは酷いな　想像以上だ　俺が居なくなっただけでここまで荒れるのか、いやそれだけじゃ無さそうだな
雪乃「いい加減にしなさい！」
八幡「いい加減にするのはお前だろうが！」
つい怒鳴ってしまった
雪乃「ひぅ……」
八幡「取り敢えず座れ」
完全に黙り込んでしまった。こんなんで大丈夫なのか
…いや大丈夫じゃないから頼まれたのか
八幡「お前ら何してんだよ、由比ヶ浜説明してくれ
俺が居なくなってからの事を」

由比ヶ浜が語り始めた
流石にこいつの文章力では分かりにくかったので
要約すると
俺が居なくなってから2人は猛反省したようだ。
それで俺に何とか戻っきてもらおうとなり、
1週間呼び掛け続けた。それでも戻ってきてくれないで雪ノ下が由比ヶ浜に対して
貴方のせいよ。
貴方があんな依頼を受けたからとか言い出したようだ。
それで由比ヶ浜が怒り、俺への説得もやめるように言い奉仕部を飛び出して行った
それで先週の木曜日に雪ノ下から由比ヶ浜に謝罪し、
奉仕部に戻ってきて欲しいと頼んで仲直りしたらしい
それで2人の中で俺の話題は触れてはいけないものとして扱った。
これが今日までの話だ
八幡「正直お前には失望したよ雪ノ下…前までのお前なら俺なんか見捨てて今までと
おりだったろ?
それで何だこの有様は?
自分を守る為に人に罪を擦り付けて」

雪乃「貴方には分からないわよ、私の事なんて」
八幡「分からねぇし分かりたくもない」
八幡「だが、これだけは言える。
そんな下らない事で俺が信じていた奉仕部を汚すな」
八幡「もう失ってしまったが、俺の知ってる奉仕部はな　いつも真っ直ぐ突き進み、どんな事があろうと挫折しない強い精神を持つ雪ノ下
馬鹿でアホっぽいけど優しくて場を和ませてくれる
由比ヶ浜、それが俺が知ってる奉仕部だ」
雪乃「そんなもの…貴方が全部壊したじゃない」
八幡「確かにそうかもな、だがな
雪ノ下が由比ヶ浜が俺が悪いんじゃない　この3人が駄目だった。俺らの選択が間違えた。1人じゃない皆悪いんだ」
八幡「だからそんな風に誰が悪いとか言うな」
結衣「でも、それじゃ納得出来ないよ！何でやり直す事が出来ないの？1度間違えただけじゃん！戻ってきてよヒッキー…」ポロポロ
涙が流れていた　悲しそうな顔をしていた
雪乃「そうよ…確かに今回は間違えた結果を出してしまった。でも貴方が居なくなっ

たら正すことも出来ないじゃない」
由比ヶ浜だけでなく雪ノ下も泣き出した
物凄く辛そうな顔をしていた
確かにそうだ。俺が一番間違えていたのだ。
1度間違えたあいつらを許してあげれずに逃げた俺が1番悪いのかもしれない。
八幡「確かに俺も逃げたして悪かった
お前らも言いたい事があったんだろ」
2人は小さく頷く
結衣「ヒッキー…私ね本当に後悔してるんだ。
自分の軽率な行動でヒッキーを追い詰めてしまって
本当にヒッキーが居ない奉仕部はとても寂しかった
物凄く自分勝手なんだけどね　ヒッキーが居なくなってから自覚したんだ。私はヒッキーの居ない奉仕部なんて嫌なの。だから戻ってきて?お願い」
雪乃「比企谷君ごめんなさい。貴方に辛い思いをさせてしまったのは私の責任よ。奉仕部部長とし依頼事態を
断るべきであった。それに受けた後もろくに何もできず、貴方に頼ってばっかだったわ。でもね、

わたしはあの言葉だけは訂正しないわ、
だって貴方を見てたら物凄く胸が痛くなるの。
私はもうその痛みに耐えられる自身はないの。
だからもうあんな事は二度としないで」
八幡「そうか…すまん俺はもうお前らを完全に信じる事が出来なくなっちまったんだ。
それでも今日ここに来たのは俺に1つの依頼が来た。
今の奉仕部は見るに堪えない　部活に戻ってどうにかして欲しいと。俺は渋ったがクライアントがお前らの事を心配していた。だから俺は戻る事にしただけだ。
俺は決してお前らの為ではない。それでもいいなら部活に参加させてくれ」
雪乃「当たり前よ、貴方は奉仕部の一員なのだから」
結衣「ヒッキー！おかえり！
今まで失った分をこれから取り返そうね！」
2人は歓迎してくれたが
俺は心のどこかにまた裏切られるのではないか？

と思っている自分がいる。
そんな事を考えてしまう自分に嫌気がさす
そんな俺は俺のことが嫌いだ

4話　本物

俺は一時期本物が欲しいと思っていた
誰にも言うことも無かったが、そう願っていた
何も言葉を発さないでも分かり合える関係…
そんな非現実的な物を俺は望んでいた
望んでなんていないな…
依存していたのかもしれない
自分を求めてくれるものに
己のやり方が正しいと信じる自分に
そして、自分のやり方で救われる者に
そういえば、彼女だけは俺のやり方を知りながら
1度も否定する事は無かった
いつも、君は面白いとけたけた笑い
まるでおもちゃで遊んでるかのように
意地悪く笑う

そう雪ノ下陽乃だ
だが、彼女は興味無いものは徹底的に潰し
気に入った物は構いすぎて殺すとまで言わしめる
魔王的な存在だ
俺では敵わない
俺は彼女の事が好きなのだろうか？
少し考えてみるが結果は否だった。
何を考えるにしても雪ノ下雪乃の顔がチラつく
雪ノ下さんの事はやはり苦手だ
多分今もあの人の手のひらで踊っているのだろう
あの人の依頼を受けた時点で俺は無理ゲーに挑戦しているのだろう
いくらこんなことを考えても無駄だと悟り眠りに着く

次の日
八幡「うす」
雪乃「ひ、比企谷君…来てくれたのね」
少し嬉しそうな顔をしていた

八幡「まぁ今の俺はここに来る事が依頼だからな」
雪乃「それでも今はいいの…貴方が来てくれればそれで…」
八幡「お、おう…」
雪ノ下の意外な発言で言葉が詰まってしまう
何あいつ俺の事好きなの？勘違いしちゃうぞ
と思いながらもそんな事ないと決めつける自分がいる
雪乃「…ふふっ」
八幡「どうした、いきなり笑いだして」
雪乃「いえ、つい嬉しくなってしまったの
貴方が居なくなって凄く寂しかったから」
八幡「そんな恥ずかしいセリフよく言えるな」
俺なんて心臓バックバクだぞ
雪乃「えぇ、本心ですもの」
八幡「なんか、その…むずかゆいな」
雪乃「そうね」ニコッ
やばいドキドキしてきた
こんな美少女と二人きりで…

前なら何かしら罵倒してきてたから気にする事無かったが、素直になったこいつはめっちゃ可愛い

コンコン

雪乃「どうぞ」

隼人「やぁヒキタニ君…それに雪ノ下さんも」

雪乃「こんにちは葉山君」

八幡「何の用だ葉山」

隼人「そんな邪険にしないでくれよ、君に話があったから来たんだ」

俺に話？今さらお前と話すことなんて無いよ

隼人「本当にすまなかった！」

突然葉山が頭を下げて謝ってきた

隼人「俺は自分のグループを守る為に君たちを…いや！君を利用したんだ！」

八幡「知ってるさ」

そんな事位知っているし何を今更

隼人「俺のせいで、比企谷も雪ノ下さんにも結衣にも迷惑を掛けてしまった。俺のせいで君たちの関係を壊してしまった。勝手だとは分かってる…だけど謝らしてくれ！本当にすまなかった」

八幡「あぁ　もう気にしてねぇよだからさっさと帰れ」
嘘だ、未だに気にしている…もし告白事態なければだなんて何度考えた事か、
雪乃「葉山君、貴方は今物凄く身勝手な事を言ってるのは理解しているかしら？」
隼人「あぁ、分かってるつもりだ」
つもりね…と小さく呟く声が聞こえた
雪乃「貴方は小学生の頃から何も進歩していない…
皆の葉山隼人として行動してきた貴方は今回も
何も出来なかった。それに助けてもらった人に
多大な被害を与えたわ。」
隼人「あぁ」
雪乃「それで？迷惑掛けてすみませんでした。
それで許されると思っているのかしら？」
隼人「それなりの報いは受けるつもりだよ」
雪乃「なら、そうねそれなら死になさい」
隼人「はっ!?何を言ってるんだい雪乃ちゃん？」
おい葉山呼び方戻ってるぞ
雪乃「あなたに雪乃なんて呼ばれたくないわ

それにこれは貴方が成長出来るかどうかの試験よ
貴方は報いを受けると言ったわよね？比企谷君は実質社会的にも精神的にも1度死んだわ。
文化祭の時貴方が推薦した相模さんのせいで
学校一の嫌われ者になった。
今回の修学旅行の件で私達と仲違いをし、
人を信じる事ができなくなった。そんな彼から罰を受けるならそれくらいで丁度いいと思うのだけれど」
隼人「……」
八幡「雪ノ下、言い過ぎだそれにお前が決める事じゃ無い」
雪ノ下の方をぽんと叩き落ち着かせる
八幡「葉山…みんなの葉山隼人をすてろ
素の自分で生きていけ」
葉山にとってはある意味1番辛い選択だろう
今まで周りを守る為にみんなの葉山隼人を演じてきたあいつには酷だろう
たが雪ノ下のより幾分かましだろ
隼人「分かったよ、それで許してくれるのなら

俺は従う。またな比企谷」
八幡「もう来るな」
最後に毒を吐き部屋から追い出す
あいつの事は嫌いだがどうなるか少し楽しみだ
多分葉山のグループは受け入れてくれるだろう
だが、その外の連中の反応がどうなるな見物だ
雪乃「貴方もドSなのね」
八幡「まぁな、あいつの事は嫌いだしな」
雪乃「同感よ」
八幡「お前と意見が合うなんてな…あれ由比ヶ浜はどうした？」
雪乃「あら？聞いてなかったのかしら？由比ヶ浜さんは三浦さん達とカラオケに行くから部活休んだのよ」
そうか、だからいつもより静かだったのか
雪乃「比企谷君、そろそろ帰りましょ」
八幡「そうだな…」
雪乃「あの、比企谷君…今日金曜日じゃない…それで、その家に遊びに来ないかしら？」

八幡「はっ？」
突然こいつは何を言っているんだ
雪乃「その、貴方とたくさん話したいことがあるの
今まで損してきた時間を少しでも取り戻したいの…
だから…駄目かしら？」
上目遣いは卑怯だぞ雪ノ下
八幡「お、おぉ　いいぞ」
あっさり受けてしまった
そのおかげで雪ノ下が住むマンションにお邪魔する事になってしまった

5話　想い

雪ノ下の家へ向かう
電車に乗り　降りてから１０分ほど歩いたら雪ノ下が
住むマンションが見えてきた
八幡「ここに来るのも２回目だな」
以前は雪ノ下が倒れた時に由比ヶ浜と一緒に見舞いに来たな
雪乃「そうね」
家の前につき
八幡「お邪魔します」
雪乃「ただいま」
家の中に入っていく
雪乃「そこのソファに腰掛けていて
紅茶入れてくるわ」
八幡「…あぁ、すまんな」
雪乃「いいのよ気にしないで」

優しく微笑み紅茶を注ぎに行く
あの後姿は何度見ても美しいな
彼女の姿に見惚れてしまう
紅茶を淹れ終わったのかこっちに戻ってきた
雪乃「どうぞ比企谷君」
八幡「おぉ…サンキュな」
紅茶を飲み終える頃
雪ノ下が口を開いた
雪乃「私ね、今まで後悔なんて縁のない人生を送っていたの。姉さんの事でコンプレックス抱くことはあるけれど、後悔は無かった」
八幡「そうか」
雪乃「でもね、この前初めて体験したわ。貴方がいなくなった時よ。浅はかな自分に…自惚れていた私に…
そして気がついた事があるの…それは…
私ね…比企谷君貴方の事好きよ」
突然の告白だった
雪乃「失うまで気が付かなかったけど、貴方が居なくなってもの凄く辛かった。前み

たいに楽しくお喋りしたかった。そんな気持ちが私を襲ったの。
そこら辺の男…葉山君でも私こんな気持ちにならないわ…貴方のだからなの」
勘違いじゃ無かったんだな…
何度か俺の事好きなのか？と考えていたが
いつも勘違いと言い聞かせ逃げていた
過去のトラウマが俺を邪魔した
いやこれも逃避行だ。裏切られるのが怖かっただけだ
八幡「あっ」ポロポロ
涙が流れていた。人に好きって言われるのって
こんな嬉しいんだ…
八幡「な、何でもっと早く言ってくれ無かったんだ
お、俺もお前の事が好きだったんだ…」
雪乃「なら、今からまた始めましょう」
八幡「無理だ…少なくとも今は誰とも付き合いたくない」
雪乃「どうして？」
八幡「…お前が告白してきてくれたのは、素直に嬉しかったんだ。だけど、あれいらい俺は前以上に人に裏切られるのが怖くなった。お前の事を心のどこかで信じられな

い自分がいる。そんな俺に付き合う資格なんてない」
雪乃「そう…分かったわ　私も信じて貰うように
頑張るわ」
八幡「すまんな…」
雪乃「謝らないでよ…今は貴方が戻ってきたくれただけで充分嬉しいと言ったじゃない」
彼女は本当に優しくなった
いや、俺に対して素直になれなったのか
本質は変わらないただやり方が変わっただけだ
少し成長したのだろう。これが陽乃さんが言ってた
成長か？
そんな事を考えていたら雪ノ下が俺の膝にアタマを置いてきた
八幡「お、おい…」
雪乃「ごめんなさい、1度やってみたかったの」
八幡「そっか…」ナデナデ
八幡「こんな光景陽乃さんが見たらどう思うだろうな」
雪乃「」ピクッ

あ、やべそういえば雪ノ下には陽乃さんの事名前で呼んでること知らなかったな
雪乃「へぇー姉さんと仲いいのね、比企谷君」
八幡「そ、そんなんじゃないぞ…あれだ前にたまたまあってしつこく名前で呼べって言われたから」
雪乃「じゃあ、私の事も名前で呼んでくれるかしら？」
い、いや流石にぼっちの俺にはハードル高いって
八幡「そ、そういうのは恋人になってからな」
雪乃「あら？その理屈で言うと姉さんと貴方は恋人という事になるわよ」クス
八幡「はぁー　分かったよー回だけな」
深呼吸する　改めて意識すると恥ずかしい
八幡「……雪乃」ボソッ
雪乃「八幡／／／」
顔を赤くしながら俺の名前も呼んできた
八幡「やっぱ無理　恥ずかしい」
雪乃「そ、そうね辞めましょう」
雪乃「その、比企谷君に依頼したのって姉さんでしょ？最近あの人よく私の事を心配してくれていたから」

あの人が心配ね…やっぱ列記としたシスコンじゃねえか
雪乃「最初はいつもみたいにからかって来たんだけど…比企谷君の名前が出たら涙が止まらなくなって…そこから姉さんの態度が変わったの」
流石の魔王も妹の涙には弱いと
八幡「クライアントの秘密を明かす訳にはいかない。
お前が陽乃さんが依頼者と思うならそれでいいんじゃないか?」
雪乃「そうね、後比企谷君その答え方姉さんが依頼主って言ってるようなものよ」クス
そうかもな
あの人にも人間らしい所あったんだな
ひざ枕したまま俺と雪ノ下は眠りについてしまった
……ガヤ…ン
なんだ声が聞こえる
…ヒ…ガヤク……
雪乃「比企谷君!」
八幡「んぁ、雪ノ下どうした?」
雪乃「目を覚ましなさい!もう」

そう言われ意識が覚醒してくる
八幡「雪ノ下！今何時だ!?」
起きてすぐに気がついた
窓の方を向けば真っ暗になっていて
夕方にここに来て眠ってしまったのだから…
雪乃「深夜1時よ」
八幡「はぁ…」
大きなため息をつく
八幡「スマホスマホ…うわぁ」
スマホを開くと何十件もの着信とメールが来ていた
そんな時雪ノ下の携帯に電話がかかってきた
雪乃「もしもし」
小町「雪乃さん！大変なんです！お兄ちゃんがまだ帰ってこなくて　メールも返信くれません！お兄ちゃんに何かあったら小町…小町…うぇえええええん」
大声で泣いてる小町の声が聞こえてくる
雪乃「落ち着いて、小町のさん比企谷君なら無事よ」
小町「え？」

雪乃「その、ごめんなさい比企谷君私の家に居るの…
わたしが我儘言ってたら眠ってしまって…
連絡するのが遅れたわ」
小町「そ、そうだったんですか…良かったお兄ちゃん事故に巻き込まれてるんじゃないかと…」グスッ
八幡「雪ノ下ちょっと変わってくれ」
雪ノ下に携帯を借り小町に誤る
八幡「すまん、心配掛けたな　俺なら大丈夫だ
さっき言っていたが雪ノ下の家に居るから」
小町「うう…良かった本当に心配だったんだからね！
でも何で雪乃さんの家に？」
八幡「そ、それはちょっと用事があって来たら
予想外に話し込んで二人ともそのまま寝ちゃった」
小町「そっか、お兄ちゃん頑張ってね
応援してるから」
おい、頑張るってなんだよ
と言おうとしたが切られてしまった

八幡「雪ノ下すまんな」
雪乃「いいのよ、私にも責任はあるのだし」
雪乃「比企谷君…もう一眠りしましょ…そのベッドで」
なっ!?何を言ってるんだコイツは!
雪乃「ち、違うわよ!ただソファで寝てたら体痛くなるからベッドで寝ましょって言ってるだけなの」
八幡「わ、分かってるから」
というか一緒に寝る前提なのね
もういいや諦めよ
そのままベッドに横になる
流石ダブルだ広いな
充分2人で寝るスペースはある
ギュ
八幡「!?雪ノ下!」
雪乃「ふふ、暖かいわね　あなたの背中
ずっとこうしていたいわ」
いやいや、今すぐ離れて!その背中に慎ましやかながらも柔らかいものが当たってる

から！
雪乃「好きよ、比企谷君…おやすみ」
ちょ！ちょっと待ってくれ！抱きついたまま眠らないで
離してよ！
スースーと寝息が聞こえる
少し力が弱まったか…
このままいったら間違いを起こしてしまうところだった
雪ノ下の腕をのけ仰向けになる
隣にはこちらを向いて眠ってる雪ノ下が居る
八幡「ははっ、どうしたものか八幡の分身がお目覚めしてる」
苦笑を漏らす
それもそうだ、家なら自慰行為でもすればいいけど
今はそういう訳にはいかない
気を紛らわせるしかないか
体を雪ノ下の方を向け　髪を優しく撫でる
あまりの手触りのよさに
何度も何度も繰り返してしまう

そして雪ノ下の髪をなでたまま眠りにつく

6話　姉妹

ん、ここは何処だろう…知らない天井だ
目を開けると見慣れない天井があった
周りを見渡したらパンさんのグッズが
いっぱい並んであるだけの部屋だ
あぁそうか雪ノ下の家に泊まったんだったな
ドアが開いた
雪乃「あら起きたのねヘタレ谷君」
久々に言われた気がした
八幡「なんだよ」
雪乃「いえ、一緒に寝ても襲ってくれなかったヘタレ君に失望してるだけよ」
なんだよそれ…
こっちは性欲抑えるのに大変だったてのに
八幡「襲えばよかったのか？」
雪乃「ええ、あなたに出来るとは思ってないけどね」

嘲笑うかのようにこちらに微笑む
八幡「こっちの気も知らないくせに」キッ
睨みつけた　少し腹が立ってしまった
こっちはお前に手を出さないように
悶々としていたことすらも知らないくせに
雪乃「ヒッ　ご、ごめんなさいからかい過ぎたわ」
八幡「雪ノ下…俺はなお前に抱きつかれてずっと
興奮していた…それでもお前を思って性欲を押さえ込んでいた…」
ゆっくり雪ノ下に近づいていく
雪乃「ごめんなさい…だからその…」
少し楽しくなってきた
八幡「襲われるってどういうことか教えてやろうか?」
雪ノ下の目の前に立つ
彼女は体を震わせていた
俺に恐怖したのか、分からない
雪乃「ひ、比企谷君…やっぱり無理やりはいけないと思うの　お願い、やめて比企谷君」

ゆっくり顔を近づける
彼女は目を瞑り体を震わせていた
そんな彼女の耳の傍で囁く
八幡「怖いだろ…だからそういう事を
言うのはやめとけ」
そう呟くと雪ノ下のでこに目掛けて
パチン
デコピンした
雪乃「いたっ！うぅ分かったわ　もう言わない」
八幡「じゃあ、俺帰るわ　世話になったな」
雪乃「ちょっと待って！朝ごはん作ってるの
だから食べてからでも」
俺より早く起きて朝食作ってくれたのか
八幡「そっか、わざわざありがとな」
雪ノ下が作ったご飯を食べ終え
ソファに座る
八幡「やっぱお前の飯は美味いな…店に出せるレベルだ」

本当にそう思う　それ程に美味い
八幡「んじゃそろそろ帰るわ　ありがとな」
雪乃「えぇ、貴方も私の我儘に付き合ってくれてありがとう。大好きよ比企谷君」
そんな真正面から言われると少し照れてしまう
八幡「お邪魔しました」
雪乃「またね、比企谷君」
ドアを開けて外に出ようとすると
ドコッ
陽乃「いたっ!?」
雪乃　八幡「「え?」」
そこには頭をぶつけ蹲る陽乃さんが居た
八幡「大丈夫ですか?陽乃さん」
陽乃「うぅ…比企谷君酷いよ〜…え!?比企谷君!?」
そこには心底驚いた顔をしている陽乃さんの姿があった
雪乃「姉さん何の用かしら?」
お前冷たいのな、実の姉が頭ぶつけて蹲ってるのに
陽乃「雪乃ちゃんの様子を見に来たんだよ　ねぇ比企谷君たんこぶ出来てない?大丈

夫かな？」
八幡「大丈夫そうですよ、まだ痛みますか？」
陽乃「うん…」
陽乃さんを雪ノ下の家にあげ
一応頭を冷やす
雪乃「比企谷君手馴れてるのね」
八幡「まぁな、小町が怪我した時とか俺が手当してたし」
陽乃「ありがと、比企谷君　それでなんで比企谷君が雪乃ちゃんの家に居たのかな？」
やっぱ聞かれちゃうよな
雪乃「姉さんには関係ないわ」
陽乃「ん？関係なくはないと思うよ　雪乃ちゃんのお姉ちゃんだし、雪乃ちゃんまだ未成年でしょ」
八幡「そうですね、でも何もありませんよ」
陽乃「証拠でも出せるのかな？1つ屋根の下に男女が泊まってるんだよ？姉が心配しない訳ないじゃない」
そんな腐ったものを見るような目で見ないでくれ
泣きたくなる

雪乃「私がれ私が比企谷君を泊まらせたの
比企谷君は何も悪くないわ」
陽乃「そう、雪乃ちゃんがそういうなら信じるわ」
雪乃「ありがと姉さん」
とりあえずは何とかなりそうだ
陽乃「比企谷君弱ってる雪乃ちゃんに付け込んで
落とそうなんて」
雪乃「黙りなさい！私が比企谷君に告白したの
弱ってるとかそんなの関係ないわ！姉さんに私の恋路は邪魔させない」
八幡「雪ノ下言い過ぎだ」
陽乃「そう、雪乃ちゃんやっと自分を持てたのね
もう、私がどうこう言う必要は無さそうね
ありがと、比企谷君」
どこか寂しそうな悲しそうな顔をしていた
八幡「お礼を言われる筋合いなんてありませんよ、
俺はやりたいように動いただけです」
八幡「んじゃ俺は失礼します、後は2人でごゆっくり」

そう言い残し部屋から去る
あの二人ならもう大丈夫だろ

7話　変化?

雪ノ下の家に泊まってから数日がたった
特に何の進展もなかったが一つだけ変わったことがかった。それは…
雪乃「こんにちは、比企谷君　今から紅茶いれるのだけれど比企谷君もどうかしら?」
雪乃「比企谷君、今度貴方のおすすめの小説貸してくれないかしら?」
雪乃「比企谷君また家に泊まり来る?」
雪ノ下からのスキンシップやら絡みが
物凄く増えた
いきなりの変わりように俺と由比ヶ浜は驚いたが
数日経てばもう慣れてしまった
由比ヶ浜からは
「ゆきのんとヒッキーって付き合ってるの?」
って聞かれた
その時俺が否定しようとしたがそれよりも早く
雪ノ下が罵倒付きで否定した

「なんで私がこんなヒキガエル君と交際しなければならないのかしら?流石の私でも怒ることはあるのよ、由比ヶ浜さん」

俺にも飛び火してるのだけれどやめてくれないかしら?

ちょっと真似してみたけど似てねぇわ

そして木曜日

部室

八幡「スースー」

俺は前日にアニメの消化をしていた為寝不足続いだった。授業後も殆ど寝り、部室でも気がついた時には眠っていたのだ

ガラガラガラ

雪乃「こんにちは、比企谷君」

雪乃「比企谷君?寝ているのかしら?」

部屋に入ると椅子に座ったまま

俯いた状態で器用に寝ている比企谷君の姿があった

雪乃「これはチャンスよ!」

携帯を手に取りカメラを起動させる

彼が俯いているので　床に座り込み彼の寝顔を激写した

雪乃「フフフフフフフ」
いや、私は何をやっているのよ
こんなのただの変態じゃない
でも、比企谷君の寝顔…
自分の中で葛藤が始まった
常識人としての私と比企谷君ＬＯＶＥの私が
ぶつかりあった
その戦いはとても熾烈なものだった
プライドの高い私が欲望に負けるなど
あってはならなかったから
だが、私の中の彼の気持ちは想像以上に手強かった
数分に及ぶ葛藤の中　勝ったのは理性だった
自分の席に戻り何も無かったかのように本を読み出す

八幡「……おい、雪ノ下写真消せ」
雪乃「なんの事かしら?私には分からないのだけれど」
八幡「寝顔撮ってたろ　あれだけパシャパシャ聞こえたら起きるわ」

ぐっ起きていたのね…
雪乃「い、嫌よどうして消さなければならないのよ
それに私はただ部室の光景を写真に収めただけよ
貴方にどうこう言われる筋合いはないわ」
八幡「なら、その光景を俺にも見してくれないか？」
ビクッ
八幡「ただ、部室の写真を撮っただけなら、俺に見せても問題ないよな？」
雪乃「い、いやその…」
八幡「それとも見られては困るものでもあるのか？
それなら無理強いはしないぞ」
ここで折れたら私のプライドが
雪乃「い、いいわよ見なさい
別にいかがわしいものも何も無いのだから」
やってしまった
彼の寝顔の写真が見られてしまう
八幡「往生際悪いな」
雪乃「ひ、ひたい!!ひはひのらけれろ!!」

ほっぺたをつねられた
物凄く痛い…
雪乃「ううっ…許さない…」
八幡「許さないも何もお前が原因作ったんだからな」
雪乃「なら、私を傷物にした責任とりなさい」
八幡「おい」
雪乃「私のモノにならないのなら姉さんに言いつけるわ」
それは卑怯だろ!!あの人どれだけシスコンだと思ってんだ!?殺されるぞ！
八幡「そ、それだけはご勘弁を」ダラダラ
雪乃「ふふっ、それじゃ今日1日私の言うことを聞きなさい、交際しろとかいかがわしいこととかは命令しないから」
八幡「……分かりました、お嬢様」
今日1日何されるのやら

8話　結論

雪ノ下の頬をつねったせいで俺は一日言うことを聞かなければならなくなってしまった。脅しでも陽乃さん使うのやめよ？怖いから

雪乃「比企谷君、確か姉さんの事名前で呼んでたわよね？」

八幡「はい、」

雪乃「なら、私の事も名前で呼べるわよね」

八幡「はい、雪乃お嬢様」

皮肉たっぷりにお嬢様を強調してみた

俺ができる数少ない抵抗だ

さぁ、どうでる？

こんな事を考えていながらも内心は女子の名前を…特に下の名前を呼んだことに凄くドキドキしている

今までそういう経験が無かったから特にだ

雪乃「呼び捨てでいいのだけれど／／／」

照れてるゆきのん可愛い

そうじゃなくてなんでこいつはこんなモジモジしてるんだよ！やりにくいじゃねぇか！

雪乃は普段なら誰にも見せないであろう姿を俺に見せている。恥ずかしがって　こちらの方をチラチラ見ながら顔を赤くしている。

八幡「雪乃？」

雪乃「ビクッ　何かしら？」

八幡「いや、こちらをチラチラ見てたから気になってな」

そう、異様なまでにこちらをチラ見していた

まるでそこに信じられない物があるかのように

あれ？この例えじゃ俺が信じられない何かってことになってしまう！

雪乃「そ、それは比企谷君…今日も可愛いなって／／／」

あれぇ？雪ノ下さん本当にどうしちゃったの？

ここは論理的に考えよう…　危ねぇ!!もうすぐ玉縄っちまう所だったぞ。腕回しちゃう所だった　ロジカルシンキングしちゃう所だったよ

八幡「そ、そうか／／／ありがとな／／／」

雪乃「ねぇ、比企谷君…貴方の本当の気持ち聞かせて？」

俺の本当の気持ち？
それは前にも言ったはずだ
雪乃「比企谷君、前に言っただろとか言って逃げるのはなしよ」
ぎくっ心を読まれた
八幡「はぁ…結論付けるのはまだ早いと思ってたんだがな」
八幡「そうだよ、お前のことが…雪ノ下雪乃の事が好きだよ　悪いか」
雪乃「いえ、とても嬉しいわ　比企谷君私も大好きよ」
八幡「そうか…」
雪乃「なら、比企谷君私とーー」
八幡「無理だ　今はまだ誰とも付き合いたくない
このぬるま湯に浸かっていたいんだ
心地のいいこの環境に」
雪乃「そう…貴方は両思いになれようが　そういう態度を取るのね　貴方らしいわ」
八幡「だろ？これで誰も傷つかない世界の完成だ」
昔に1度言ったことがあるような気がする…確か文化祭の時だったか
だが今回は自己犠牲でめ何でもない
俺の本心なんだから　この欺瞞に満ち溢れた環境でも

これだけ気持ちが良いのなら少しだけでも長く居たい
そう思えるようになってしまった
多分いずれ俺と雪乃は交際を始めるだろう
そうしたら一色や由比ヶ浜はどうなるか？
明白だ距離をおこうとする
特に由比ヶ浜は部活に来なくなる可能性が高い
だから俺は今は誰も選ばない
ただそれだけだ
欺瞞に充ちたこの世界に祝福を